

---

# 猫背刑事と探偵教師の事件ファイル

ものかき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猫背刑事と探偵教師の事件ファイル

### 【Nコード】

N5516S

### 【作者名】

ものかき

### 【あらすじ】

荒川警察署の刑事、平原祐一は署内にて「署内一猫背な刑事」など、情けない称号をいくつも掲げる、だめな刑事を絵に描いたような刑事である。

そんな彼は署から、荒川で唯一の小中一貫校に送られた、『この学校に爆弾を仕掛けた』と書かれた謎の脅迫状（というか予告状）について現地で調べて来い、という厄介な指令を受ける。

だめ刑事が出来ることなんてたかが知れてるんだけどな……。なんて思いつつ、その学校の教師である吉村先生と協力をしながら

学校の爆破を阻止しようと奔走するのだが・・・？

「猿の遠足」 問題編（前書き）

学校が舞台ですが、活躍するのは学生ではありません。  
主人公は刑事と教師です。

学生は九十九パーセント出てきません。ご注意ください。

## 「猿の遠足」 問題編

1

平原祐一は、荒川警察署内で「署内一猫背な刑事」刑事である。

彼の猫背は、ひどいときには190?近い長身が頭を垂れた稲穂のようになるのだ。それ以外にも、「署内一自信のなさげな刑事」「署内一頼りない刑事」と、ダメな称号の三冠を達成してしまった。そのせいか彼に回る仕事はほとんど事件とはほど遠い雑務を回されることが多い。しかし本人は凶悪犯罪を相手にしなくてもいいといった構えを取る、ダメな刑事を絵に書いたような刑事なのである。なので、この日署長に呼ばれたときは、なにか厄介事に巻き込まれるのではないか、という考えでただでさえ頭を垂れている稲穂は、さらに実を付けてしまった。

彼は重い足取りで署長のデスクに向かった。

「おう、来たか」

署長はよく怒る典型的な上司だが、ブルドックのようないわゆる『キモカワ』な顔のせいで「署内一怒っても怖くない刑事」の称号を得てしまった可哀想な上司だ。

「厄介事ですか？」

「用件を話す前から『厄介事』というな。市民のために働いてるんだぞ、俺達は」

ブルドックがほえる。市民、ねえ…。

「荒川区で唯一の小中一貫の学校は知ってるだろう？」

「ええ、まあ。それが何か？」

平原がそう返すと、署長はただでさえシワの多い顔にさらにシワを寄せた。

「その学校宛に脅迫状が届いた」

「は？」平原は自身の耳を疑った。

何？キヨウハクジヨウ？それはおいしいですか？

「学校側は、その事を内密にしておきたいらしい」

「そこ内密にする必要があるんですか？」

「嫌そうな顔をするな」

署長は平原の頭をはたく。くそつ、ばれたか…。

「それで？」

「お前、学校へ行つてこい」

「…は？」

何？ガツコウ？それは、楽しいところですか？

「そこへ行つて、詳しいことを調べて来い」

「調べて、どうするんですか？」

「随時状況を報告しろ。こっちはそれにあわせて必要な人数を捜査に出す。学校で大勢の警官にうるつかれたくないんだぞうだ。学生たちが授業に集中できない」

それはつまり、事件は解決しろ、ただし目立つな、ということか。

平原は、学校側の人使いの荒さに、さらに猫背になりながらため息をついた。

「・・・それで、どうしてそんな事件性のある案件をこちらにまわすんですか」

「お前、その質問が不謹慎だとは思わないのか？」

所長はよく、第三者に平原を説明するとき、『警察官の風上にも置けないやつ』、と言う。いまの平原の台詞は、まさにそれを裏付けてしまうものだった。

「普通刑事なら、事件性の『無い』案件に文句をつけるものだろう」

「何事も例外はありますよ、署長・・・」

「情けない・・・」

なんて無気力な刑事なんだ、こいつは・・・。

「とにかく、今すぐに現場へ行け、そしてめばしい情報を掴んでくるまで帰ってくるな」

「無茶振り・・・ほかに人はいないんですか？」

「いない。いま荒川警察署の刑事はほとんど外に出回っている。つべこべ言わずにさっさと行くんだ！」

署長は馬を追い立てるように平原を声の鞭で叩いた。猫背な馬は、ブルドックに追い立てられる形で部屋から出た。

部屋から出るとき、平原は思った。どうせ面倒くさいことはみんな自分に押し付けるんだ、と。

2

平原は、学生の頃から朝礼での校長の長話は大嫌いだった。いや逆に、校長の話が好きだという人物は、おそらく精神状態に異常があると思われる。すぐに病院へ行くことをお勧めしたいと平原は思う。ただ、ひとつ不思議なことは、どの学校でも校長の話というのは長いのだ。どこで示し合わせたのか、まさか、暗黙の了解ではあるまいか……。

「……でして、警察の方からは、早急にこの由々しき事態をですね、今すぐに解決してもらいたいんですよ、はい」

平原は、校長室のソファ―これもお約束のやたらと高そうな、深く座れる革張りの―に座って、すでに一時間以上たっている校長の長い話を、半ば放心状態で聞いていた。

驚かないで欲しい。校長はまだ『前置き』しか喋っていないのだ！

「でしてね、刑事さん……」

「はあ」

義務教育をずいぶん昔に終えたはずの平原だが、この年になっても校長の話が嫌いなのに変化は無かった。しかし、一つ変わってしまったのは……。

「刑事さん、聞いておられますかな？」

「はい、続けてください」

……大人になってしまったことで、朝礼のときのように立ったまま寝ることが出来なくなった、ということだ……！！

くそ、なにが『はい、続けてください』だっ！平原は、自己嫌悪による軽い頭痛が始まった。

「それで・・・事件の詳しい内容は、どういったものなのですか？」

平原は、校長が息継ぎをするコンマ何秒という刹那の時間に、『本題』を切り出した。

「ああ、そうですね、それを喋っておかなければ」

校長は席を立った。

「・・・ふう」

平原は頭をたれ、ため息をつく。校長の話はなぜ長いかは、学校の七不思議の一つだ・・・！

校長が戻ってきた。

「これです」

彼が取り出したのは、白い封筒だった。おそらく、脅迫状の入っている封筒だろう。

平原は、それを受け取って中に入っている便箋を取り出した。「拝見します」

脅迫状には、こう書かれていた。

『学校という閉鎖された「箱」の中に生きる愚民どもへ。私は「箱」の中でとらわれている無垢な子供たちを解き放つ指名を持った使者である。』

聞くがいい。私はこの「箱」に一つの爆弾を仕掛けた。その爆弾は、人を殺してその座に上り詰めた歴代の王のように、悪を滅した英雄のように、いずれ正義と呼ばれることになるだろう。

私はその爆弾で、この「箱」の爆破させる使命を子供たちに託す。

はたして、頭の悪い愚民どもに、私の使命をとめることは出来るかな？

嘘だと思っほうっておいたら、後に叩かれるのは無能な愚民どもと、無能な警察どもだ。せいぜい性質たちの悪いマスコミとモンスターペアレントに叩かれるがいいさ。私は確実に、この「箱」を爆破する。

くたばれ、具民ども』

「・・・ええと」

手紙にチラッと、警察に対しての侮辱もしていなかったか？

「脅迫状というより、予告状・・・いや、挑戦状ではありませんか」  
「ええ・・・そうです」

校長は神妙な顔でうなずいた。そして、こう続ける。

「一応学校のほうでは、校舎の近くや、登下校の道に不審な人物がいなかったか、学生に尋ねたのですが、いまのところそれらしき人物の情報は挙がっていません」

手がかりはゼロ。平原は軽いめまいがした。

「いたい、たった一人でこれをどうしろと・・・？」

彼は誰にも聞こえない声でつぶやいた。すでに稲穂は限界まで垂れ気味である。

「本当に、よろしく願います！刑事さん！子供たちの命と、校舎と、私の首が懸かっています！どうか、爆弾の爆破を阻止して、犯人を捕まえてください！」

校長は、懇願の目つきで平原を見ながら叫ぶ。ああ、結局最後の部分が大事なかね、と平原は妙に納得した。決して嫌味などではない。自分も嫌だ。こんな他人の都合で自分の首が飛ぶのは。

「だめもとで聞きますが、まだ爆弾の隠し場所は見つかっていないのですね？」

「・・・ええ」

「そうですか・・・」

まずい。前途多難。この「署内一猫背な刑事」「署内一自信のなげな刑事」「署内一頼りない刑事」の三冠を達成してしまったこの平原祐一には荷が重過ぎるっ！

「それと」

校長の意味深な接続詞に、平原の方がビクッと震えた。

「ま、まだなにか？」

これ以上荷物を増やさないでくれ！内心平原は叫んだ。これ以上の

荷物は自分の猫背では支えきれない！

しかし、校長はそんな平原の私情など知るよしもない。

「このことは、校内でも一部の教師と口の堅いPTAしか知りません。どうか、内密に、お願いします」

「・・・しかし、私はこの学校のことをよく知りません、捜査しようにも、動きにくいのが本音なのですが・・・」

そうだそうだ、自分になんかむりだよー・・・。心の中の平原が舌を出して挑発する。

「ああ、確かにそうですね」

校長は悠長に手をポンツ、と叩いた。この人は、本当に事の重大さを理解しているのだろうか？

「あなたに我が校の教師を一人、助手として協力させましょう。わからないことはその人に聞いてください」

「は、はあ・・・」

教師。

その言葉に、平原は背中を丸めた。稲穂が頭を垂れるように。どうも学生時代から、平原は教師というものが苦手である。いくら協力してくれるといっても・・・。

「おそらく協力してくれる先生は、きっと刑事さんの力になると思いますよ」

「はあ」

どこからそんな確信が湧いてくるのだろうか？

「ちなみに、その先生ってどんな人なんですか？」

平原は、疲れた声で校長に聞いた。すると、校長は腕を組んで答えた。

「その先生は、低学年の生徒がつけた夏休みの日記を読んだだけで、その生徒の親が企てていた無理心中を阻止したんです」

平原は、ペタペタと来客用のスリッパを履き、一階の一年二組の教室を、後ろのドア越しから腕を組んで眺めた。

いまの授業は国語である。生徒たちは、教壇に立つ教師の話を熱心に聞いている。

ほう、と平原は感心した。小学一年生は腕白なのに、この授業ではやけに熱心に教師の話を聞いているな……。

平原は、黒板と、その前の教壇で弁をふるう教師を見つめた。

黒板には、いま習っている教材のタイトル、『さるのえんそく』と教科書のような字で書かれていた。

猿の遠足？聞いたことも無い。平原は、ここ何年間で教科書が大幅に作り替えられている、というテレビのニュースを思い出した。

ジェネレーションギャップだ、と彼は思った。

そして、今度は教師を見る。

教壇に立つ教師は女性だった。教壇のほうに前に立つその教師よりも存在感があるのではないか、というぐらい、彼女は小柄だった。

髪は短く切りそろえられており、鼻の上にちょこんとかけた眼鏡越しの眼光は、小学生に向けられるものとは思えないぐらいに鋭く光っている。

……教師の目だ。

平原は思わず目をそらした。まずい、こんな目つきの鋭い先生と一緒に犯行を阻止するのか……。そう思うと、やはり平原の背が丸くなる。

彼女の名前は、吉村智恵子といった。専攻は国語、ということだ。

教師の中では、実力のある教師として人気があるが、個人的に近づくこうという人はいないようだ。当たり前だ、と平原は思う。そんな目つきしてちゃあね。

キーン、コーン……と、丁度いい具合に授業終了のチャイムが鳴る。吉村が教壇の上を片付けるのと同時に、一年に組の生徒が一斉に立ち上がった。

そして、次の瞬間、一斉に子供たちが教室の外へ飛び出した。

「ぐ．．！？」

平原は、子供たちのタックルをもろに食らった．．．。いくらかの生徒からキャツキャツと笑われた。く、屈辱．．．！

平原がタックルを食らったおなかをさすりながら前を見ると、吉村が目の前に建っていた。

「あ．．．ええ、と」

平原は言葉に詰まる。自分、睨まれてる．．．？

「吉村智恵子と申します。よろしく願います」

吉村はなんの前置きもなしに自己紹介をした。右手を差し出す。

「あ、よ、よろしく願います」

平原は反射的に右手を差し出した。よし、あっちから近づいてくれたのは予想外だが、滑り出しは好調だ。

「自分は、荒川警察署刑事、平原祐一と申します」

「そうですか」

「．．．．」

「．．．．」

か、会話が．．．続かない．．．！

平原は、妙な焦燥感に刈られた。こんなときはどうすればいいのでしょうか？

しかし、平原が次の話題を必死に探しているうちに、吉村はすでに踵を返して歩き出してしまふ。

「ああ．．．。あの、ちょ、ちょっと？」

「なんででしょう？」

平原が呼び止めると、吉村はクルツ、と正確な角度で平原のほうに振り返る。

「あの、捜査の協力をしていただけ、というお話でしたが．．．」

「ええ。私はなにをすればいいのですか？おっしゃってください」

あまり抑揚の無い、数式を唱えるような喋り方だった。平原は、なんとなく親近感がもてない。

「．．．なにをすればいい、ですか．．．？ええ、と」

そんなこと、まったく考えていなかった。

そういえば、彼女は日記を読んだだけで一家の心中を阻止したんだっけ。それなら、彼女に事件の内容を話せば、万事解決・・・？

「あの、ひとまず、事件の概要をお話したいのですが・・・」

「そうですか、それなら、一度私は職員室に行きますので、応接室でお待ちいただけますか？」

「は、はあ・・・」

平原は、そう答えるしかない。

応接室で平原が待つっていると、吉村は数分も立たずに姿を現した。

平原はあわてて立ち上がる。

「どうぞ、掛けてください」

吉村は相変わらずの無機質な声で言った。平原は、命令されたかのように、「はいっ」と答えて座った。続けて吉村も椅子に座る。

「さきほどの・・・国語の授業ですか？『さるのえんそく』とはどのような内容なんですか？」

平原は、待っている間の数分で頭をフル回転させて考え出した話題を吉村にぶつけた。どうにかしてこの雰囲気を断ち切りたい。先ほどから胃がキリキリしている。

「ああ、あの童話ですか？」

吉村は、数式を唱えた。

「ええ、自分が小学生の頃にはそういうのを習った記憶が無くて・・・」

「あれは、猿の集団が森へ遠足に出かける話です」

吉村は、何の前触れもなしに内容を話し始めた。

「遠足へ出かけた猿たちは、森の奥に入った後、人数確認のため、リーダーの猿がほかの猿たちの数を数え始めます。すると、リーダーは猿たちの数が一匹足りないことに気づいてパニックになります。しかし、全員の名前を唱えさせると、ちゃんと全員いるのです。」

「・・・へえ、ミステリーですね」

平原は適当に相槌を打った。しかし、内心では先が気になる。

「どういうことかわからなくて混乱している猿たちに、ある、小柄な猿がこう叫ぶのです。『僕たちは、数を数えるときに、自分を入れていないよ!』と」

「なあんだ、そんなことですか」

平原は、間の抜けた声を出した後、ハッ、としてあわてて口を閉じた。まずい、思わず『素』が・・。

「す、すいません」

「猿たちは安心して遠足を続けて一日を楽しく過ごしました。そういう内容です」

吉村は、平原の謝罪を完全無視してそう締めくくった。

「・・・」

「・・・」

会話が続かない。しょうがないので、平原は、本題に入ることにした。懷から白い封筒を出す。

「これが、学校宛に送られてきた脅迫状・・・というか、予告状？です」

平原は、吉村に先ほど校長から受け取った脅迫状を渡した。

「一度目を通していただけますか？それで事件のほとんどが説明されることになります」

吉村は黙ってその文章に目を通した。そして三十秒後、封筒から視線をそらし、顔を上げる。

「何かわかりましたか？」

平原は期待を込めた口調で吉村に尋ねる。

「・・・『箱』はこの学校の校舎のこと、愚民は教師、自分はこの行為を正義だと思っている。何らかの形で子供たちを巻き込もうとしている」

「・・・」

「・・・」

「そ、それ以外は？」

「私の考えが聞きたいのですか？」

「ええ」

「犯罪者の心理分析なら、そちらのほうがプロだと私は認識しておりますが」

「・・・はあ」

平原の背が丸くなる。

「あなたは以前、学生が書いた日記を読んで、その親の無理心中を阻止したとか。出来れば、その慧眼で今回の事件も意見がいただきたいのですが」

「・・・平原刑事」

吉村は、いきなり名前を呼ぶ。

「は、はい？」

「協力、というのは相手に力添えをする、という意味です。私はあくまであなたの助手、実際に操作の指揮を取るの是一般人である私ではなく、警察官であるあなたです」

「はあ」

「確かに私は、成り行きで生徒の親の身勝手な心中を阻止することは出来ました。しかし、あの時は運がよかっただけです。今回の事件は、一般人が手におえるものではありません。一回の功績で、全ての意見を鵜呑みにされるのはあまりよろしくないと思います」

「・・・」

平原は内心でぐう、と唸った。吉村の意見には隙が無い。どちらにしろ、はじめから平原が口を挟む余地など存在しないかのようだ。

「・・・し、しかし・・・今の自分では、犯人を特定することなど出来ません。どうしても情報が必要なのです。あなたの意見が、大いに役立つと思うんです。自分は」

「早い話が、なんでも自分でしてもいないのに人に頼るな、ということなんです」

「はい？」

吉村は平原の弁解をまた無視してそうだったので、彼は思わず声を

上げた。

「いまの私には、平原刑事がすべてのことを自分で解決しようとして誰かに丸投げしようとしているようにしか見えません。いえ、あなたは、この事件を真剣に解決する気がないのではありませんか？」

「・・・」

「そんな、警官に協力しようとは誰も思わないはずです。残念ですが。こんなことでは、犯人が調子に乗るだけです。犯人はおそらく、常にあなたを見ているはずですから」

「・・・」

吉村は立ち上がった。「失礼します」

クルツ、と正確に踵を返し、背を向けた。もう話すことは話した。そう背中が語っていた。

面接室のドアが閉まる音が、自分の存在を否定するかのようによけに大きく響いた。今の平原には、ドアの音でさえそういう風に聞こえた。

今のあなたには協力できない、その言葉は、やけに平原の争点に響いた。そして、脳内で自身の過去がフラッシュバックする。

平原の父親は刑事だった。正義感から警官になることを決意した父は、いわゆる叩き上げでその地位まで上り詰めた。部下からの信頼も厚く、生きた伝説とまで呼ばれた。

一方、幼い頃の平原は自由奔放な少年で、自分がしたいこと、好きなことをして本能のままに暮らした。勉強などろくにしなかったし、毎日外で遊んで、あるときはがむしゃらに部活動に明け暮れる日々。平原は、卒業するまでずっとこういう日々が続くと思っていた。

しかし、彼の回りではいつも父親が警察官であるがために、平原も当然その道に進むのだらうとよく言われた。

平原はそれが氣にくわなかった。そんなことを言われる度に将来のことを考えるのが嫌になり、真面目な学校生活をしなくなった。ど

うして、自分がそんなことを言われなくてはならないのか。

そんな平原が、中三の時。

進路指導にて平原の相手をした教師に、彼はいい態度をしなかった。そんな時、我慢の限界に達した教師が言い放った。

『お前は、駄目な人間だ』

彼にそういった教師は、校内でも真面目で知られる教師だった。おそらく、平原の態度のせいで頭に血が上ったに違いないが、それでもその言葉は平原の心に深い傷を残した。

自分が所詮だめな奴なら、とことんそういう風に生きてやる！

平原はその日から、半ば人生を放棄し始めた。

部活にも顔を出さなくなり、授業は寝て過ごした。不登校にならなかったのが不思議なぐらいである。

就職先には特別困らなかった。なにせ父親はあの（・・・）平原だ。

コネを使えばいくらでも警察官になど簡単になれる。

そんな気持ちで任された今回の事件。すでに協力者である吉村智恵子は、平原に協力してはくれない。

『あなたは、この事件を真剣に解決する気がないのではありませんか？』

平原は、吉村にいと簡単に自分の考えを見透かされてしまった。

そう、自分はこの事件に真剣に取り組む気など毛頭ない。なぜなら、自分は『だめな人間』だからだ。

こんな自分に何が出来る？教えて欲しい。

はつきりいつて、『さるのえんそく』に出てくる小さいサルのほうがよほど使い物になる。

「はあ・・・」

平原はひとり、応接室に大量のため息を送り込んだ。

4

平原は職員室に向かった。目的はひとつ、吉村に会いに行くためだ。

あつてどうするのか、そんなことは後になって考えればいい。とにかく、自分がいくらだめな人間であつても、事件を解決しなくてはブルドックに大目玉を食らうのは火を見るより明らか、いや、大目玉ではすまない。

とにかく、あの理屈屋先生なら自分がどんなにだめな人間で、吉村が自ら事件を解くしか道はないと言つことを説得しなければならぬ。

職員室の扉へノック。ノックつて普通何回？

平原は迷つた拳句コンコンコン、とノックを四回繰り返した。すると、職員室の扉がガラガラ、と開いた。現れたのは、吉村智恵子である。

「え……！」

いきなり吉村！？平原の胃がひっくり返る。まだ何も喋る内容を考へていない。

「……」

「……」

「……」

「平原刑事」

吉村はいきなり名前を呼んだ。

「は、はい！？」

「手を挙げた後に質問を考えない！」

「はいい！」

吉村の鋭い言葉に、平原は思わず猫背な背筋をピンツ、と伸ばしてしまつた。

自分は学生かつ！？平原は自己嫌悪に陥る。

「それで……どういったご用件ですか？」

「え、ええと……」

平原は返事に窮した。まさか、自分はだめ人間なんです、とか言つ？

「……吉村先生」

「はい？」

「自分は、警察の捜査に参加したことはありません。いえ、正確には参加しようとしたことがあります」

「・・・」

「そんな自分に、この事件をどう解決すればいいのか、一般論でもかまいませんので教えてください！」

バツ、と平原は頭を下げた。

何やってんだ自分！！馬鹿か！？何頭を下げてるんだ！？そんなことでこの先生が協力でもしてくれるのか！？

平原は再び自己嫌悪に陥る。

「平原刑事」

吉村は名前を呼ぶ。「はい・・・」

「まずは顔を上げてください」

バツ、と平原は顔を上げる。どうしてか、彼女の前では全ての動きがコンマの世界だ。

平原が前を向くと、そこには先ほどと何も変わらぬ・・・いや、先ほどより表情が柔らかくなった（ような気がする）吉村の顔があった。

「もし、あなたが今日このまま帰っていたら、私は完全にあなたに協力しない気でいました」

「はい・・・。はい？」

「『知らぬは一時の恥、聞かぬは一生の恥』・・・わからないことを誰かに聞く、それは大人になるにつれもつと勇気が必要になってきます」

「はあ」

「あなたは、自分が刑事としての経験をつんでいないことを正直に私に話した上で私に協力してくれ、とおっしゃいました・・・これで私も、自分が何をすればいいのか、はつきりとわかりました」

「はあ」

平原は、自分がオウムになった気分になった。さきほどから『はあ』しか言えていない。

「なにしろ、あなたは事件を解決してくれる気になったんですね？」

「・・・はあ」

「・・・オウムでも言葉のレパトリーがもうちょっとあるんじゃないのか？」

「まあ、仕事ですから・・・」

平原がそうだった瞬間、吉村は彼を睨んだ。

「理由はともあれ」吉村はめがねを押し上げる。

「事件をかいけつするというのであれば、早速調べてみましょうか」

「・・・何を？」

「考えてもいないのにすぐ聞かない！」

「はい！」

吉村の叫びに平原は姿勢をただす。

「・・・こそ、教師という職業はいつもこういうのか・・・？」

ふたりは職員室に入った。

吉村のデスクは職員室の奥のほう、校長のデスクから一番遠い場所にあった。

「横のデスクの椅子を使ってください」

吉村がそういうので、平原は横の誰かのデスクの回転椅子を吉村のデスクの前まで手繰り寄せた。

「まずは手紙を見てみましょうか」

吉村の言葉を受けて、平原は懐からあの白い封筒を取り出す。

「犯人は、爆弾を使ってこの校舎を爆破しようとしています」吉村は前置きも無く本題を切り出した。

「でも、爆弾は見つかっていないそうですね。校長先生がおっしゃっていました」

「よほど見つからない場所に設置してあるか、もしくは何かでカモフラージュをしているのか、あるいは、誰かが見落としている、と考えたほうがよろしいですね」

「なるほど」

平原は吉村の頭の回転の速さに舌を巻いた。よくもまあそこまで推測を働かせられるものだ。

「そして、注目すべき点は、犯人が学生のうちの誰かに爆弾を爆破させようとしていることです」

「『私はその爆弾で、この「箱」を爆破させる使命を子供たちに託す。』、ですね？」

「ええ、どうやって託すのか謎ですが。たとえば、爆弾の起爆装置がリモートコントロール式なら、それも可能です」

「リモートコントロール？」

「遠隔操作のことです」

「ああ・・・しかし、ただでさえ警戒を強めているなかで、たとえば爆弾の起爆スイッチを学生のうちの誰かに託すことが出来るでしょうか？」

「おそらく無理です。学生たちには不審者や不審物を目撃した場合、すぐに大人を呼ぶように言いつけてありますから」

「それなら、どうやって・・・？」

「おそらく、それらを踏まえると、後者に仕掛けられた爆弾は一目見ても爆弾だとはわからないようなもので、スイッチもそういうものになっている、と考えるのが一番無難です」

「となると、やっぱり校舎に仕掛けられた爆弾を見落としている・・・？」

ふたりは顔を見合わせた。

「やっぱり、ふたりでもう一度爆弾を探しましょう」平原は提案した。

「わかりました。校舎を回ってみましょう。私が案内しますから」

「はい」

平原は立ち上がった。

「あ、平原刑事」吉村が歩き出そうとする平原を呼び止める。

「なんですか？」

「背筋、伸ばしてくれませんか？猫背になってますよ」

「無理です」

平原は即答した。

これにはさすがの吉村も、『やつてもみないで無理だと言わない！』  
とは言えなかった。まさか、即答されるとは……。

5

二人は校舎の中をくまなく見て回った。平原は、途中花や理科の実験で育てている糸瓜に水をやる学生をうらやましく思った。なにせ、日差しが強いので校舎の中というのは蒸し暑い。花に水を上げる学生の手を持っているのは、ホースだった。いまどきの学生の花に水をやる手段は如雨露<sup>じょうろう</sup>ではなくホースのようだ。

平原は着込んでいるスーツ首からうつすらと汗がにじむを感じた。二人は暑い中、各教室、理科室、音楽室、図書室、物置等……虱潰しに爆弾を探した。

しかし、やはりそれらしきものは見つからなかった。見つからないようにおいてあるかもしれない、ということで、一部屋をかなりの時間をかけて探したのだが……。

「ありませんね」

平原は、汗だくになりながら吉村に言った。

「ありませんね」

吉村は疲れた様子も見せずに涼しい顔でそう答えた。毎日学生を相手にする教師の体力というものは底知れない、と平原は思った。

「ここまで探していないなんて……」

「校舎の外に出てみましょう」

「それにしても……」平原はスリッパから靴に履き替えて吉村に言う。「犯人はいつたい誰なのでしょう？学生たちに聞いてみても不審者は見なかった、ということでしたよね」

「はい。本当に不審者と出くわさなかったのか、たとえ接触したとしても、学生がその相手を不審者だと思わなかったのか・・・」

「でも、犯人は学生の手でスイッチを押させようとしているわけですから、接触しない、というのはありえませんか？」

「わかりません。しかし、おそらく接触しないのはありえないでしょう。しかし、いまから学生に近づこうとしても不可能です」

「なぜですか？」

「学生たちはいま集団登下校をさせています。犯人もつかつに近づけないはずですよ」

「・・・なるほど」

二人は校庭をぐるりと一周する。校庭ではサッカー部がど真ん中を陣取り、バスケット部は隅のコートで練習をしている。人口密度に明らかな差があった。バスケット部、気の毒に・・・。

「あれ？」

平原は、校庭の隅の花壇を見て声を上げた。花壇は、校舎の裏側にある駐輪場の近くにある。駐輪場は日が差さず、全体的にじめじめしている。吉村は足を止めた。

「どうしました？」

「え？あ、ああ・・・あそこで植物に水を上げている。学生がいるじゃないですか」

「ええ。それがなにか？」

「あの子、自分たちが校舎の中を回る前からずっと花に水をやり続けてるんですよ？そんなに手間の掛かるものなんですか？花の水やりって・・・」

「・・・」

吉村は花壇を鋭く見据えた。あごに手を当てて、じつくりとその学生を見る。平原はそんな吉村のオーラに、一步身を引いた。

「・・・」

吉村は、花壇のほうに歩き出した。平原はあわててついていく。

「ねえ」

吉村は花に水をやる学生に話しかけた。女の子で、年はおそらく低学年だ。

「今日は、君が花の水やりの当番なの？」

「ちがいます。ちよつと前に学校で先生に『一日に一回は人の役に立つことをしましょう』っていわれて、花の水遣りをすることにしたんです」

平原は戦慄した。小学校の低学年で、教師の無理難題を律儀に守っている偉い子がいたのか！自分なんかそんなのは一回も守ったこと無いぞ！

「着眼点はそこですか？」

吉村が平原に冷たい視線を送る。

「え・・・先生いま、自分の心のなかを・・・！？」

「表情でお見通しです」

「・・・」

彼女は視線を学生に戻した。

「それで、君はいままでずっと水やりをしてたのかな？」

「・・・そうです」

返事まで若干の間があつた。

平原と吉村の二人は、顔を見合わせた。

「ねえ？」

吉村は、女の子の前にしゃがんでその顔を見上げた。

「先生秘密にしててあげるから、本当は何をしていたのか教えてくれない？」

「・・・」

女の子はうつむいた。やっぱり、何か隠し事をしているらしい。

「先生怒らないから」

古今東西、その台詞を吐いた教師は全員その後ぶち切れているな、と平原は思った。

「・・・水を流してって・・・」女の子は小さな声で言った。

「え？」

「水を流してつて頼まりました」

「・・・どういうこと？」

女の子は、校舎につながっている、屋上に溜まった雨水などを地面に送るチューブ状の管を指差した。

平原は、そちらのほうに近づく。よくよく目を凝らしてみると、その管にぽっかり、半径に三センチほどの・・・そう、ホースが通せるぐらいの大きさの――穴が開いていた。

「吉村先生、ここに穴が開いています」平原は叫んだ。

「そこに、水を流してつて頼まれたから・・・」少女が言い訳をするように言った。

「だれに頼まれたの？」

「知らない人」

「知らない人？」

吉村は、驚きで一段階音量が上がった。

「どうして、先生にすぐ言わなかったの？」吉村は追及モードに入った。

ほらみる、やっぱり怒った。平原は確信した。やっぱり、怒らないといった教師は結局怒るんだ。

「だって・・・いわれただけなんだもん！」

女の子はついに泣き出してしまった。ああ、やっちゃった。

「・・・平原刑事」吉村は女の子が泣いてもいたって冷静な口調で平原を呼んだ。

「はい？」

「その管をつたって、校舎の裏側を見てきてもらえませんか？私はこの子を何とかします」

「了解です」

確かに、警察学校ではないにいる子供のあやし方は習わなかった。そうしたほうが好都合だ。

平原は、チューブ状の管を沿って校舎を回り始めた。はつきり言っ

て、平原は校舎の壁にへばりついている状態だから、彼がいまのところ一番の不審者のように思える。

管はやはり駐輪場に続いていた。学生たちと先生たちの自転車が無造作に置かれている。

管は、唐突に途切れていた。それもそのはず、雨水は屋上からこの管を通り、最終的に駐輪場の地面に設置されたマンホールへと流れるのである。

しかしながら、その管の途切れ方は、明らかに異常であった。本来ならマンホールスレスレ、地面から数センチのところまで途切れているはず。しかし、その管の先は人為的に一メートルほど切り取られてあった。管の先からマンホールまでは高さが一メートルぐらいまである。

もし、この状態で雨水が流れたら、管から一メートル下のマンホールまでその雨水がドバドバあふれ出てしまうのだ。

しかし・・・。

「なんだこれ？」

その切られた管の先、マンホールの上にはある物がおかれてあった。それは・・・。

「平原刑事！何かありましたか？」

後からやってきた吉村が、平原のほうに小走りで寄ってきて聞いた。

「先生・・・これを見てください」

平原は、そのあるものに向かって指差しながら言った。吉村は平原の指した指の先を追う。

「・・・これは・・・」

解答編へ続く・・・

「猿の遠足」 〽問題編〽 (後書き)

次回、解答編です。

出来るだけ早めに掲載します。

気長に、楽しみに(？)お待ちください。

「猿の遠足」 〽 解答編 〽 (前書き)

問題編に引き続き、解答編です。

「・・・これは・・・」

チューブ状の管の先にあつたもの、それは・・・

「・・・ポリタンク？」

吉村は、完全に我が目を疑うような口調で言った。

そう、マンホールの上には、灯油やガソリンを入れるような赤い色のポリタンクがおかれていた。管の先の水が、ポリタンクの口に入るようになっていた。

「なんですか？これ・・・」

平原は訳がわからなかった。爆弾探して、見つかったのがポリタンク？

宝を探しに行ったら骨が見つかった、そんな感じた。平原は妙に脱力する。

「これ、犯人が準備したものなんですかね？」

平原は吉村に聞いた。

「・・・恐らくは」

吉村は慎重に答える。

「なんのために？」

吉村は平原の質問には沈黙した。鋭い目をポリタンク一点へと注ぐ。

「先生？」

「平原刑事」

吉村は平原に視線を移して言った。「この近くに、これ以外にもポリタンクがあるはずです。探しましょう」

「え・・・？」

これ以外にもポリタンクが？平原は首をひねった。詳しいことを聞こうとする前に吉村はすでに辺りの搜索にかかっている。

平原はいわれたとおりにするしかない。彼は駐輪場をくまなく探した。駐輪場は塀で囲まれている。その塀には小さな扉が備え付けてある。そこには『関係者以外立ち入り禁止』と書かれたプレートが張ってあった。

「吉村先生、この塀の向こうは何があるんですか？」

「たしか、職員室の裏側のベランダにつながっているはずです。正直に告白してしまうと、数年前まではよく教員たちがタバコを吸うためにそのベランダに立ち寄っていたんです。学生たちの目に留まりませんから」

「はあ・・・」

聞いてはいけないものを聞いてしまった。

「しかし、職員室の通用口を封鎖してしまったので、ここ数年間誰もその先には立ち入っていないはずです」  
つまり、人目につかない、ということか。

平原は、自身の長身を利用して、塀に手をかけた。腕力をフル活用して塀をよじ登る。

両腕の筋肉がかなり震えてきた。ああ、明日は確実に筋肉痛だな・・・

。平原はそう思いつつ、塀の向こうに顔を出してベランダを見た。そこには・・・

「うへえ・・・？」

平原は思わず声を上げた。ベランダには・・・大量のポリタンク。

「先生！ありました！大量のポリタンクです！」

「本当ですか！？」

平原は、吉村の声を背中に受ける。彼はそのまま塀を登りきり、ベランダのほうに足を踏み入れた。

改めてそのポリタンクを見てみると、不思議なことがわかった。大量にあるポリタンクのうちほとんどが空だ。何も入っていない。

「吉村先生！？」

「どうしました！？」

「なんかポリタンクのほとんどが空なんですけど？」

「平原刑事！そのポリタンクに触らないでください！」

いつもは数式を読むような吉村の口調が珍しく切羽詰ったようになった。

「どうしてですか？」

「・・・そのポリタンクのどれかに、変な装置がくっついていませんか？」

「変な装置？」

「空になっていないポリタンクに、装置がついていると思うのです」

平原は、すばやく目を大量のポリタンクに走らせる。

すると、壁の近くに、明らかにほかのものと違う形のポリタンクがあった。

「なんだこりゃ？」

平原はそのポリタンクを凝視する。

タンクの両端に、なにやら黒い棒のようなものが突き刺さっている。その突き刺さった棒の先に、理科の実験で使うような電極―電池と豆電球をつなぐ緑や赤い銅線―の太く巨大バージョンのような電極がつながっていて、それは学校の壁についているコンセント―どうしてこんなところにコンセントの穴があるんだ！？と平原は内心突っ込む―につながっていた。

さらに奇妙なのは、その変なポリタンクには透明な液体が入っているのだが、その液体に突き刺さっている黒い棒から決め細やかな気泡が少しずつ出ている。

「・・・なんすか？これ？」

「平原刑事！いま扉の鍵を持ってきますから、何にも触らないようにしてください！」

吉村はそう叫んだ後に、平原にとって衝撃の一言を放った。

「おそらく、それが爆弾です！」

「・・・えええええ！？」

ガシャン、という振るい金属音が舌かと思うと、塀に取り付けられた古い扉がギイ、と鳴りながら開かれた。吉村がベランダに入る。

「これは・・・」

「先生、自分わけがわからないんですが・・・」

「先ほどもいいましたが、これが爆弾です」

「このポリタンクのどこが爆弾なんですか!」

平原は攻めるような口調で吉村に叫んだ。このポリタンク、ほとんどが空じゃないか・・・。

「・・・何か勘違いをしているようですが、このポリタンクの中身は空ではありません。しっかりと二種類の気体が入っています」

「気体?」

平原はさらに首をひねった。吉村はこくりとうなずく。

「水素と、酸素」

「・・・はい?」

吉村は、ここまで言っても理解できない平原を見て、ため息をついた。

「わかりませんか?水素と酸素が交わった気体に火をつけると、爆発するんですよ」

「爆発!?!」

「・・・中学の理科で習っているはずですが」

「ぐう・・・」

吉村の言葉は槍となつて平原に突き刺さった。

「飛行船に使われている気体がヘリウムなのもその理由です。昔は水素を使って飛んでいたのですが、爆発の危険からヘリウムになったのです」

「へえ・・・それで、この妙な装置は?」

「おそらく、このポリタンクにたまつた水を電気分解する簡単な装置です」

「電気分解って、アレですか？Hの形をした装置に水を入れて電気を通す・・・あれ？」

「Hの形・・・電解槽のことですね」

「そんな名前でしたっけ？」

「ええ・・・」

「あのポリタンクに突き刺さっている黒い棒はなんですか？」

「黒鉛です」

「黒鉛？鉛筆の？」

「ええ。あれは電気を通すので。ポリタンクの中の水を効率よく電気分解するために使ったのでしょう。ああやって差し込んでおけば、電極をつなぐのに手間が掛かりません」

平原にもちよつとわかつてきた。恐らく、黒鉛から出ている気泡は、水素と酸素に違いない。

「犯人は、水まきの学生にこのポリタンクに水を入れる作業を手伝わせていたんですね」

「ええ。しかし・・・どうして、犯人はこんな手間の掛かるものを・・・」

吉村は低くうめくように呟いた。そのとき、平原はハツとしたように言った。

「・・・というか、これスイッチありませんよね」

「スイッチは必要ありません」

「ええ！？どういうことですか？」

「爆発させるときに、このポリタンクのふたを全て開けておけばいいのです。そうすれば、後は教師が爆発させてくれます」

「どういうことですか？」

「タバコ」

「え？」

「教師のうちには、このベランダへの通用口を封鎖されても、窓からタバコをすう人がいるんです。このベランダでタバコをすうためにライターをつけた瞬間ドカンですよ」

「・・・」

恐ろしい・・・。

「で、でも・・・後は犯人を捜すだけですよね」

「その犯人がわからないから苦戦しているのです」

「・・・まあ、そうですね・・・」

平原は背中を丸めた。それを見た吉村は、思いつきり平原の背中を叩いて背筋を伸ばさせた。刑事相手にも容赦ない。平原は猫のよう  
のビクツと反応する・・・猫背だけに。

吉村は、あごに手を当てた。思案顔になる。

「・・・先ほどから何かが引つかかっています」

「へ？何が？」

「何か重大なことを見落としているような・・・」  
「・・・？」

平原は、今までの行動を思い返してみたが、自分の脳では見落としているものなど到底わかるはずが無い。十秒もたたずに考えるのをやめた。

「・・・やっぱり、自分って『さるのえんそく』に出てくる小さい猿より頭が悪いよなあ・・・」

「・・・『さるのえんそく』・・・？」

吉村は独り言のように呟く。それは平原には聞こえなかったらしい。彼は独り言を続けた。

「はあ・・・こんなことならもう少しちゃんと授業に参加すべきだった・・・」

「・・・」

「まあ、いまさら後悔しても遅いか」

「平原刑事」

「・・・なんですか？」

吉村が神妙な顔で呼ぶので、平原は猫背気味に吉村を見た。その瞬間・・・。

ガシッ、と平原の両腕を両手で掴んだ。

「へ・・・？」

「それです！『さるのえんそく』ですよ！」

吉村は歓喜しながら叫ぶ。平原は口をあんぐり開けた。

「・・・まったく話が見えないんですが」

「犯人がわかりました！」

「・・・ええ！？」

いまの平原には、吉村の発言のほうがよほどの『爆弾』発言だった。

8

「・・・ほ、本当ですか？犯人がわかったって・・・」

平原は半信半疑で聞いた。先生、まさかそんな探偵のようなひらめきが・・・。

「正確には今にも犯人がわかる、ということです」

「ど、どういうことですか？」

「いいですか？今までの犯人に関する情報をまとめてみると・・・」

「まず、犯人は誰にも目撃されていない、ですね。不審者情報がゼロですですから」

「ええ。不審者はね」

「はい？」

「平原刑事、『さるのえんそく』の内容を思い出してください」  
吉村はいつに無く興奮した口調で尋ねた。

「え？人数を確認するときに、自分の人数を数に入れていなかった、ってやつですか」

「そう！いまの私たちはまさにその状況に陥っているんです！」  
そんな状況、といわれてもいまいち平原は理解がいかない。

「・・・というと？」

「つまり、私たちは校舎に爆弾を仕掛けた、という犯人の人物像を勝手に『不審者』だと決め付けていたんです！でも、実際は・・・」  
「まさか先生・・・学生が犯人だとも言いたいんですか？」

「・・・学生は、職員室のベランダや、タバコの事情などを知らないでしょう?」

「確かに・・・じゃあ・・・?」

「ええ、犯人は教師の誰かです」

吉村は人差し指を立てる。

「先ほども言ったとおり、私たちは犯人を部外者だと思って不審者の目撃情報を集めたわけですから、目撃情報が集まらないのは当たり前なのです。そして・・・」

吉村は眼前に広がるポリタンクを指差した。

「ポリタンク、水、電極・・・水素の爆弾を作るためのこれ等の装置は、全て学校で手に入るものです」

「ポリタンクって、学校で手に入ります?」

「我が校は、冬は暖房ではなく石油ストーブを使います」

「ああ・・・いまだき石油ストーブ・・・」

平原は呟いた。あの絶滅危惧種がこんなところにあるなんて・・・。  
「そして、水やりの学生が言った『知らない人に頼まれた』という証言」

「・・・教師が犯人なら、その女の子も顔見知りのはずでしょう? 顔を知らないとは、意味不明です」

「ええ、あれは私が質問をするときの言い回しが悪かったんです」

「いいまわし?」

平原は鸚鵡返しに聞いた。

「おそらく犯人は、あの子に水を管の穴に通すように話したとき、こういったのではないでしょう?」先生、ある人に頼まれてあそこの管に水を入れるように頼まれたんだけど、忙しくて毎日いけな  
いから。。ちゃんにたのんでいいかな?」

「なるほど、その言い回しなら管に水を通すことの頼んだのは、言ってきたその人でなく、『あの人』になるわけだから、女の子がわからないのも当然ですね!」

「ええ・・・私はあの時、『誰がそう言ってきたの?』と聞くべき

だっただんです。失敗しました・・・」

吉村は肩を落とす。平原はあわてて「いや、あの場合はしょうがないでしょう・・・」と慰めた。

「でも、ということは、ですよ・・・？その女の子にもう一回話を聞いて、どの教師がその子に水やりをするように『言った』か聞けば・・・その人が犯人ですよね？」

「ええ！」

二人は顔を見合わせてうなずいた。平原は叫ぶ。

「いきましよう！先生！」

先ほど花壇に水撒きをしていた女の子は、集団下校をしようと校庭に集まった学生たちの中にいた。

「私が行ってきます」

吉村は平原に言った。ぜひともそうして欲しい、と平原は思った。

あんな大勢の学生の前で、自分の姿をさらすのは出来れば避けたい。吉村は女の子に近づく。

「あ、吉村先生」

幸いにも女のこのの方が先に気づいてくれた。吉村はしゃがむ。

「さつきは先生、怒っちゃってごめんね」

女の子は首を横に振った。

「一つだけ聞きたいことがあるんだけど、さつき頼まれことをしてきたのは、知らない人っていったよね？」

「はい」

「じゃあ、それを君に言ったのは誰かな？誰が頼まれことを君に伝えてくれたのかな？」

「・・・」

女の子はちよつと考えたあと、元気良くこう答えた。

「校長先生！」

「失礼します！」

吉村は返事を待たずに校長室のドアを強く開けた。デスクで書類を処理していた校長は、面食らったような顔をした。

「ど、どうしたんだね？ 吉村先生、刑事さん・・・」

「芝居はよしてください、校長先生。あなたが犯人ですね」

「・・・はい？」

吉村は単刀直入にそう言った。最近平原は気づいたが、前置きをせずに本題に入るのが彼女の会話パターンらしい。

「しらばつくれても無駄です。あなたはポリタンクで電気分解した水素で爆発を起こそうとしているのでしょうか？ しかも、学生に犯罪の片棒を担がせようとするなんて、どうかしています！」

機関銃のような早口で吉村はまくし立てた。しかし、発音は完璧。

さすがは国語教師、と平原は場違いな感想を抱く。

「・・・まさか、そこまで気づいていたとは・・・」

「・・・！」

二人は校長の言葉に、反応した。

「認めるんですか？」

平原は言う。はつきり言って自分から認めてくれるなんて好都合の上ない。

「・・・」

校長は押し黙った。二人は次の言葉を待つ・・・その時。

ダッ！

「あっ！」

校長はものすごい速さで脱兎のごとく逃げ出した。二人は完全に油断していたので、すれ違って校長室から出る校長を逃がしてしまった。

「待てっ！」

「追いましょう！」

二人は走り出した。

驚いたことに、校長はすでに廊下を高速で走っていた。校長先生、という役職からでは想像が出来ない速さだ。

「なんて豪速・・・」平原が走りながら言う横で、吉村が息を切らしながら言う。

「・・・思いつ、だしましたっ、先生はっ、学生時代っ、陸上部な上につ、空手初段っ、黒帯ですっ・・・」

「吉村先生、大丈夫ですか・・・？」

「私のことはっ、気にしないでっ、追ってくださいっ・・・」  
「了解！」

平原は速度を上げた。校長との距離を縮める。

しかし、校長は校舎を飛び出し、道路に出た。集団下校する学生たちと引率の教師が、なんだ、という目で校長を見た。それを追う平原。

と、数十メートル走った後、校長はいきなり止まった。

「うわっ・・・」平原も急ブレーキをかける。

そこで、校長はなんと、空手の構えを取った！

「えええ！似合わねえ・・・！」

「着眼点はそつちですかっ！」

追いついたらしい吉村が、平原の背中に突っ込みを浴びせた。「気をつけてください！」

「うーん・・・これはまずい展開ですね」平原はきよろきよろと周りを見渡す。何か武器になるもの・・・。

そのとき、曲がり角から剣道教室に向かう小学生ぐらいの子供数人がこちらに向かってきた。

「ラッキー」

平原はそう呟いて、その学生達のほうへ向かった。

「ちよっと、竹刀それ貸して」平原は、一番前を歩いていた学生の竹刀を、返事を待たずにひったくった。

「平原刑事・・・！」

吉村は心配そうに叫んだ。どちらかというと、身を案じているというより、本当にそれで大丈夫なのか、という心配。

その間に、校長は平原に向かって一直線に突進した。ものすごいスピードだ。

「刑事！」

「吉村先生、こんな言葉を知っていますか？」

「・・・はい？」

平原は、校長に向かって竹刀を構えた。猫背だった背筋は、いつの間にかピンツ、と伸びきっていた。

そして・・・。

ザンツ！

「・・・。」

一瞬にして勝負が決まった。平原の振り下ろした竹刀は、校長の頭を強く叩いた。パシイン！という小気味よい竹の音が響く。

校長は、声も無く倒れた。

「あなた・・・剣道の心得があったのですか・・・」吉村は恐る恐る聞く。

「『剣道三段、空手初段』」

「・・・はい？」

平原がぼそつ、といった言葉に、吉村は聞き返した。

「どういう意味か、知ってます？」平原は挑戦的に聞いた。

「・・・わかりません」

あの吉村が悔しそうにそういうので、平原は胸がすくような気持ちだった。

END

「猿の遠足」 〽 解答編 〽 (後書き)

どうだったでしょうか？

作者自身かなりトリックに無理があつたかと思われます。

「なんだ、そりゃ？」という心構えで楽しんでいただければ幸いです。

この小説の特徴は、トリックが全て学校で習つたもの、ということになっていきます。

ただ、猿の遠足に関しては、私が小学生の頃に習つた記憶があるのですが、ネットで探してみても、いまの教科書には載っていないようです……。残念。

電気分解や、そのための装置に関してはまったくもって付け焼刃です。専門家から見れば、「何言つてんだ、こいつ」状態です。ご勘弁！

とにかく、ご了承、感謝です！

違うシリーズも気に入ってくれるとうれしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5516s/>

---

猫背刑事と探偵教師の事件ファイル

2011年4月24日23時49分発行